

自然排卵周期-凍結融解胚移植の不妊治療施設における意義と課題

小西 晴久¹⁾ 藤原 奨¹⁾ 北山 利江¹⁾ 門上 大祐¹⁾ 森本 真晴¹⁾ 勝 佳奈子¹⁾
中岡 義晴¹⁾ 福田 愛作²⁾ 森本 義晴³⁾

1) IVF なんばクリニック

2) IVF 大阪クリニック

3) HORAC グランフロント大阪クリニック

【目的】凍結融解胚移植の子宮内膜調整法は、周産期合併症の観点からホルモン補充周期（HRC）から自然排卵周期（NC）へとトレンドが移行しつつある。今回、妊娠初期の流産率に着目して HRC と NC を比較検討した。また、不妊治療施設における NC の診療上の課題を明らかにすることを目的とした。

【方法】妊娠成績に関しては 2020 年から 2022 年までに当グループ 3 施設にて凍結融解胚移植を行った患者 6138 症例 11623 周期の患者背景及び臨床妊娠率、流産率を診療録より後方視的に検討した。また、2023 年 6 月から 2024 年 6 月の 1 年間の当院の NC505 周期のキャンセル率および日曜日の胚移植件数について検討した。

【結果】HRC は 7822 周期、NC は 3801 周期でそれぞれ移植時の男女平均年齢、子宮内膜厚、分娩歴、流産歴、BMI、AMH など患者背景には有意差は認めなかった。胎嚢を認めた臨床妊娠率は HRC 36.6% に対して NC 37.6% と差を認めなかったが、胎嚢確認後の流産率は HRC 25.3% に対して NC 21.1% ($P < 0.05$) であった。流産の発生を目的変数とし、年齢、流産歴、移植胚の発育段階、PGT-A 実施の有無で調整を行った多変量解析においても、NC は HRC に比べて流産率が有意に低い結果が得られた。

当院の NC の選択比率は 2022 年には 19% であったが、2023 年 6 月から 2024 年 6 月の 1 年間には 45% へと増加していた。それに伴い日曜日の胚移植件数は増加していた。また、NC の周期キャンセル率は 16.6% (505 周期中 84 周期) で、その主な理由としては卵胞発育不良が 57%、早発排卵が 25%、患者都合が 11% であった。

【結論】流産率は NC で有意に低く、凍結融解胚移植の子宮内膜調整法によって差のあることが示唆された。自然排卵が期待できる症例の子宮内膜調整法には NC が望ましいと考えられる。一方で、スケジューリング面では患者側面、医療者側面とも課題が明確となった。今後は、より効果的で、より柔軟なスケジュールの NC の運用体制を構築することが求められる。